

● 原子力人材育成のすそ野拡大

➤ 他(多)分野学生への教育機会を拡大するためには？

- 原子力専門の学科がないため、そもそも他分野学生を対象に原子力教育をしている。具体的には研究・教育用の原子炉を使った実験・実習。「資源とエネルギー」というエネルギーに関する幅広い講義も実施。他大学の学生を集めてのイベント・原子炉の見学。
- 原子力から放射線利用のようにすそ野を広げることで他学部の学生が参加する。原子力の定義を広げるべき。教養の学生に対する講義にはキャッチーなワードを入れると良い。初等教育も重要。小中学校の教員を対象とした原子力の知識の普及。静岡大の取り組み（STEAM教育×教育学部学生）
- 高専からの入学、学部は機械・電気、大学院から原子力を学ぶ形。多様な分野の100名程度のM1が受講する講義において原子力教育を実施。原子力以外の科目（例：技術者倫理）の中で原子力の話もしている。接する機会がないだけで興味を持っている学生は意外と多いのでは。地域における防災活動の中でも取り組める。
- 原子力人材育成ネットワークでは学生施設見学会、1F見学等を実施。まずは目を向けて知ってもらう。研究室紹介のウェブサイト（全国の原子力研究室を紹介している。）環境は整いつつあるが、情報を届けるためのアプローチをどうしていくか。海外事例を参考にする。興味を若いうちから持っていただくことも肝要。

● 原子力人材育成のすそ野拡大

➤ 「原子力人材育成」の再定義は必要か？

- 広い意味での原子力人材、こういった人材を育てる必要があるのか？
- 原子力に関心を持ってもらえる人が必要。理系ばかりでなく文系も含め。少子化の流れの中で幅広く原子力人材をとらえる必要あり。
- 現在原子力に携わっている人たちの多くは必ずしも原子力を専攻した人たちではない。広範に原子力の現状や魅力を伝えていく。将来に向けたシナリオも見せる必要がある。
- ANEC発足時の原子力人材育成はどちらかというと狭義の原子力。その意味では、幅広い原子力、周辺分野への目配りも重要になってきているかも。
- 原子力とひとくくりにはしているが、原子力人材育成という言葉は人によってとらえ方が異なる。解像度を上げる必要あり。原子力・放射線・エネルギーの導入部分と専門的な部分の棲み分け、技能者の教育、何をターゲットにして育成するのかなど。
- 教える側の教員が工学系のいろんな分野に所属していることをむしろ活かさないか。

● アカデミアと産業界の関係

➤ 大学/高専が原子力教育から撤退したら？

➤ 生涯学び続けるためには？

- どんなバックグラウンドで入ってきても企業内で育てればよい、となると大学の必要性は？国を支える基幹の分野という観点からは、産業界だけでなくもっと広い視野が必要。大学の役割は大きい。技術だけでないところもある。
- 各企業は教育プログラムを持っている。なので、撤退してもすぐには困らないのではないかのよう気はするが、学問としての原子力をフェアに見ることが出来るのが大学。なので撤退すると困る。
- スウェーデンの実例、高校まで原子力を学ぶことはない、にもかかわらず世論調査だと8割以上原子力利用に賛成。対話と議論がベースにある社会。権威・権力を疑う（クリティカル・シンキング）。原子力に対して専門知識がなくても、主体的に調べて考えることが身についている。原子力の専門的教育は大学以降。三つの大学で原子力教育を実施。大学はあくまで基礎教育。専門的知識は企業に入ってからという仕分け。社会人の学び直しは日常茶飯事で、失業時や転職時に大学に入りなおし、学費無料で再教育を受けることが出来る。このため、継続的にスキルアップ&ステップアップしていくことが一般的になっている
- 事業者において、原子力分野からは一定数入ってくるが、機械・電気分野からはなかなか入ってこない。炉主任なども考えると、大学における原子力教育は必要。